既存のバス路線を活用した貨客混載事業（兵庫県神戸市）

移動販売と野菜の配送で高齢化が進む ニュータウンのコミュニティを活性化する

INTERVIEW

少子高齢化に直面するニュータウンと輸送需要が減少する路線バス

神戸市西区の押部谷(おしべだに)地区は、神戸電鉄沿線に月が丘や美穂が丘、富士見が丘など昭和40年代に開発された郊外団地が並ぶ。かつての「ニュータウン」も現在では少子高齢化が進み、生活の利便性低下や地域コミュニティの衰退が懸念されている。そしてこの状況は、同地区を走る路線バスにも深刻な影響を与えることになった。

「もともとはニュータウンと最寄りの神戸電鉄各駅を結ぶ、いわゆる団地輸送の目的で設けられたバス路線なのですが、その後神戸市の中心部へのアクセスがいい市営地下鉄が西神中央まで延伸されたことで、バスは神戸電鉄沿線のニュータウンからそごうなど商業施設があった西神中央を結ぶ役割に変わりました。現在ではその輸送需要も減少しています」（神姫(しんき)バス地域事業本部 野田年洋部長）。

そこで新たな収入源として考えられたのが、貨客混載の取り組みだ。本実証では、ショッピングセンター「エキソアレ西神中央」を運営する双日を共創のパートナーとした移動販売と、兵庫六甲農業協同組合を共創パートナーとした農産物の配送を行っている。神姫ゾーンバスでは、移動販売の店舗として使えるように、客席スペースを減らして後部を荷室に改造したバスを投入している。

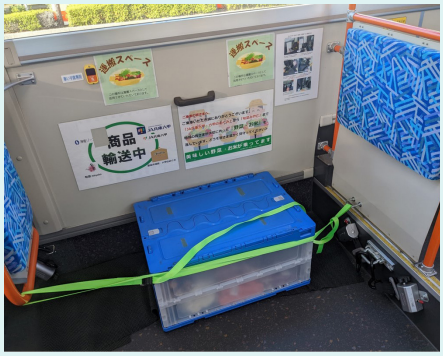
「移動販売は『出張エキソアレ』として、毎週水曜日の昼にバスの終点近くにある月が丘団地センターで行っています。水曜は集会所でイベントがあったり、キッチンカーが出ていたり、人が集まりやすい環境が整っていたのでそれに合わせる形としました。販売品目は弁当や

高級パン、菓子、コーヒー豆などで、団地センターには商店（コープ）もあるので商品がかぶらないように配慮しています」（神戸市都市局駅まち推進課 泰中秀樹課長）

両方向に貨客混載の需要があることが重要

移動販売といっても、ただ商品を積んで並べて売っているだけではない。エキソアレ西神中央のテナントのスタッフが直接売りに来ている点が特徴的だ。そこではコミュニケーションが生まれ、まちの賑わいを創出する狙いもある。

「テナントとしても、お客様と直接コミュニケーションが取れることは大きなメリットです。また、夕方などお店が忙しい時間帯は出張が難しいので、現状は平日昼に開催するしかありません。さらにコストもかかるので、継続するためにはそれなりの売上げも必要です。いかにコストを下げながら、人を集めて売上を上げるかという部分も課題になります」（泰中氏）。「交通事業者としては、車両を改造しているので有効活用したいですが、規制もあるので運行中の販売はできません。同じような状況を抱える他の住宅団地にサービスを拡大することも視野に入れていますが、集客ができてバスを停める場所があるなど、条件をクリアする必要があります。」（神姫ゾーンバス 村上正弘社長）。

本実証のもう1つの試みである農産物の配送は、緑が丘～西神中央駅線の途中にある農業公園前バス停で「農協市場館六甲のめぐみ」の農産物を積み込んで、エキソアレ西神中央内の飲食店に納品するという取り組みだ。

「もともと兵庫六甲農業協同組合が納品していたのですが、コストを下げるためにバスに積み込もうという試みです。月・水・金曜に店舗側の需要に応じて野菜コンテナ1～3個程度の配送になりますが、移動販売とは逆ルートということで、交通事業者としては両方向に貨客混載の需要があることは非常にありがたい。こちらは店舗側の需要があって、バス停まで届けてもらい、バス停で引き取っていただければすぐにでもできるので、今後事業を広げていく強みの一つであると考えています」（野田氏）。